

サソ

苦悩の果てに ②

はばだけ「カルチャー」

世界の人気ホラー



「ザ・リング」のゴア・バービンスキー監督と主演のナオミ・ワッツさん(右)に囲まれる著者の鈴木さん

「文壇最強の子育てパパ」の異名をとる作家の鈴木光司(46)。まな娘の育児のため「主夫宣言」をしていたときに執筆した一冊がホラー小説「リング」だった。その作品が今、単行本で、映画で、日本から世界へと大きくはばたき、多くの人々の心を引きつける。

「子守をしながら書いたものが、まず日本で売れ映画化もされて大ヒットしてとてもうれしかった。そのうえ、日本映画の『リング』をハリウッドでリメイクした『ザ・リング』が作られ、欧米、アジアなど世界各国で翻訳された本と一緒に人々に愛されている。まさかここまで育つとは夢にも思いませんでした」

「リング」ははじめ自らの作品が、次々と世界で大人気を呼ぶ現象に鈴木は驚き、心底から喜ぶ。

相次ぐ翻訳、映画も後押し

慶応大学文学部に在学中から演劇の世界とかかわってきた鈴木。文学で注目を浴びたのは、一九九〇年に「楽園」で第二回日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受けたときだった。さらに「楽園」より先に書いた「リング」がロコミで話題を呼んだ。続編の「らせん」や「ループ」も共にベストセラーになり人気を高めた。

日本のホラーブームの火付け役となった「リング」は国内で映画化され、大ヒットした。その映画がハリウッドでリメイクされる。鈴木には「本当に実現するのか」という思いも強かった。それだけに、実際に撮影に入ったときは、感動を味わいたくてハリウッドの撮影現場を訪れた。

「ザ・リング」が完成。昨年、米国内の映画館や欧州、アジア、そして日本に配給されるや、各地で話題になった。映画がキャンペーン役となり、各国で「リング」はじめ鈴木の本がさらにヒットした。

今春、米国の日系出版社「バリーティカル社」

「これからは自分の人生だというような顔をしている、と娘に言われるんですよ」という鈴木。世界の人々に楽しんでもネルギーを与えることができるような作品を書き続けることを夢見る。

「僕は、誰もが抱く恐怖を世界に共通する論理で描いています。その小説を、例えば米国の小さな町の主婦などに楽しく読んでもらえると思えば、それはうれしいですよ」

表現方法から日本的でなく欧米的な作家だと自任する鈴木。作品の幅が広がる一方で、八年ぶりのホラー長編「エッジ・シテイ」の連載(角川書店「野性時代」)も始まる。これも世界を意識した作品という。

ドキュメント 挑戦

(編集委員)

敬称略 榎木誠